

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 鳥越 信吾君

論文題目 近代的時間の社会学

審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員	
	文学修士	浜 日出夫
副査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員	
	社会学修士	岡原 正幸
副査	早稲田大学文学学術院教授	
	博士（文学）	那須 壽

I 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序論

- 1 問題の所在—社会学における時間の問題
- 2 本論文の目的
- 3 時間カテゴリーの豊穡化によって何が明らかになるか—「近代的世界像」の問題
- 4 本論文の構成

第1部 「近代的時間」の社会学的研究

第1章 「時間の社会学」の歴史的展開

- 1-1 「絶対時間」との対決—一九世紀後半から二〇世紀初頭の哲学
- 1-2 時間の社会学の成立—質的な時間の探究
- 1-3 時間の社会学の展開—「統合的な社会理論」の時代

1-4 近代的時間の諸性格

1-5 二つの近代的時間論と真木悠介の四象限図式

第2章 近代的時間の変容—ハルトムート・ローザの加速化論

2-1 ローザの立場

2-2 加速化論の基本的視角

2-3 現代社会における近代的時間—近代的時間の第四の性格としての「流れ去る」性格

第3章 真木悠介の近代的時間批判—もう一つの時間の比較社会学

3-1 はじめに

3-2 第一の比較社会学—抽象性と不可逆性

3-3 第二の比較社会学—時間のニヒリズム

3-4 もう一つの比較社会学—積み重なる時間

3-5 「天空の地質学」への展開—『宮沢賢治』の時間論

3-6 横の比較社会学と縦の比較社会学

第4章 第1部の結びにかえて—「流れ」のメタファーの問題

第2部 「垂直に積み重なる時間」の社会的・現象学的研究

第5章 シュッツ社会理論における時間論の位置づけ

5-1 『意味構成』第二章における孤独な自我の構成分析

5-2 『意味構成』第三章における他者理解論

5-3 「同時性の理路」と「自己解釈の理路」

5-4 「自己解釈の理路」におけるふたつの過去

5-5 反省とレリヴァンス—前述定的領域の先構造化

5-6 小括—時間論を基底にもつシュッツ社会理論

第6章 シュッツにおける「垂直に積み重なる時間」

6-0 はじめに

6-1 「垂直に積み重なる時間」における過去

6-2 「垂直に積み重なる時間」における未来

6-3 「垂直に積み重なる時間」における現在

6-4 小括

第7章 シュッツにおける社会的世界の時間的構成

7-1 社会的世界論の概要

- 7-2 通常の諸社会的世界の相互関係
- 7-3 社会的世界の時間的構成
- 7-4 地平的な諸社会的世界の相互関係

結論

- 1 「垂直に積み重なる時間」にもとづく世界像は何を捉えうるか
- 2 本論文のまとめと成果、課題

初出一覧

文献

謝辞

II 本論文の概要

序論では、本論文の目的が述べられる。本論文の目的は、(1) 社会学において自明の前提とされてきた近代的時間を主題化し、その特徴を明らかにし、(2) アルフレッド・シュッツの時間論を検討することを通して、「垂直に積み重なる時間」という、「流れ去る」ことを特徴とする近代的時間とは異なる時間を取り出し、(3) これにより近代的時間にもとづく近代的世界像とは異なる世界像の可能性を追究することである。

このために、第1部では時間の社会学の諸研究に依拠しつつ近代的時間についての検討がなされる。また第2部ではシュッツの現象学的な時間論を「垂直に積み重なる時間」(野家)という時間のあり方を提示したものとして捉え、それにもとづいてシュッツの社会的世界論の再構成がなされる。

第1章は、時間の社会学の諸研究を、それらが近代的時間をどのように主題化してきたのかという点から検討している。

まず時間の社会学の学説史の概略が示される。すなわち時間の社会学は、デュルケームの『宗教生活の原初形態』に代表されるような「近代的時間以外の別の時間性の探究」という問題設定を長らくとった後、一九七〇年代以降に近代的時間そのものの対象化に着手するようになった。

また、近代的時間に関する時間の社会学の基本的な知見が整理される。すなわち一九七〇年代以降、近代的時間そのものを主題とするようになった時間の社会学は近代的時間を「計量可能性」「抽象性」「直線性」の三つの性格のもとに把握してきた。しかしながら同時に、ハルト

ムート・ローザが述べるように、時間の社会学には研究の断片化という問題点も伴っていることが指摘される。

第2章は、近代的時間が現代社会においてどのように変容しているのかということを、ローザの主著『加速化』(Rosa 2005)にしたがって検討している。ローザによれば、現代社会は時間の形状の上での「直線性」が弱まる一方で、時間が急速に過去へと「流れ去る」性格が強くなっている社会として特徴づけられる。この検討をふまえ、第1章で提示された、近代的時間を「計量可能性」「抽象性」「直線性」の三つの性格をもつものとして捉える視座の修正がなされる。第1章では、「直線性」によって、時間が直線として観念されるという意味での形状の上での直線性と、時間が川のように「流れ去る」という性格の二つが意味されていた。だがローザの指摘を踏まえれば、近代的時間の現代的変容を十全に捉えるためには、両者は区別されなければならない。したがって、近代的時間とは「計量可能性」「抽象性」「直線性」「流れ去る性質」の四つの性格をもつものであること、そしてその現代的変容を捉えるためには、特に「流れ去る性質」に着目する必要があることが述べられる。

第3章では、日本を代表する時間の社会学として真木悠介(見田宗介)の時間論についての検討がなされる。『時間の比較社会学』(真木 1981)と『宮沢賢治』(見田 1984)の検討を通して次の点が示された。すなわち、真木の比較社会的な時間論は、通常、近代と非近代とを比較し「生きられる共時性」のもとに近代的時間を批判する「横の比較社会学」として捉えられているが、これとは別に、近代と非近代の双方を含む顕在的な「世界」とそれらの基層に位置する潜在的な〈世界〉とを比較し「累積する時間」のもとに近代的時間を批判する「縦の比較社会学」として読まれうる可能性があることである。

第4章では、第1部の議論を再度整理し、第2部の議論への橋渡しがなされる。

第2部では、シュッツの時間論の再解釈を通して、近代的時間とは別様の「垂直に積み重なる時間」の析出と、それにもとづいて近代的世界像とは異なる世界像の探究がなされる。

第5章は、シュッツの主著『社会的世界の意味構成』(Schütz 1932)の検討を通して、シュッツの時間論と社会理論との関係について考察している。両者の関係は、現象学的還元領野における分析と現世的領野における分析とのあいだの関係として、したがって『意味構成』第二章と第三章との関係として捉えられる。本章では、『意味構成』第二章と第三章との関係について、先行研究(廣松 1991)とは異なり、『意味構成』第二章が第三章を基礎づける関係にあること、したがってシュッツの時間論が彼の社会理論を基礎づける関係にあることが論じられる。

第6章は、シュッツの時間論を「垂直に積み重なる時間」という時間のあり方を示したものとして読み直し、過去・現在・未来の時制ごとに検討している。

第一に、「把持」および「沈殿」概念をもとに描かれる「垂直に積み重なる時間」における過去は、シュッツが各私的な経験の沈殿物としての「主観的な知識集積」とは区別して、経験の社会的な沈殿物としての「社会的な知識集積」という概念を提示していることから分かるように、社会的な性格をもつものとして、したがって私には体験不可能な「歴史」の領域へも伸び広がるものであることが示される。

また第二に、「予持」概念をもとに描かれる「垂直に積み重なる時間」における未来は、〈既知の一樣態としての未来〉という「規定可能な未規定性」の性格のもとに描かれる未来と、不意打ち的に到来する〈非知の未来〉という二種類のものとして描かれうるということが論じられる。これらの過去および未来の特徴づけは、同じく積み重なる時間性に目を向けているブルデューのハビトゥス論よりも広い射程の過去および未来を捉えうるものである。

そして第三に「垂直に積み重なる時間」における現在は、一方で過去と未来によって支えられながら、他方で過去と未来を規定するという性格をもち、したがってシュッツにおける現在と過去および未来との関係は「相互基づけ関係」として捉えられる。これにより、シュッツの時間論は、ブルデュー的な「過去中心主義」的時間把握と、ミード的な「現在中心主義」的時間把握の双方をその射程に含むものであることが明らかにされる。

第7章では、シュッツが『意味構成』第四章で提示した社会的世界論を「垂直に積み重なる時間」に沿って再構成することが試みられる。シュッツの社会的世界論は、通常、客観的時間を共に構成する「再想起」および「予期」という対象的志向性にもとづいて把握され、「流れ去る時間」にもとづく近代的世界像をエゴロジカルな視点から捉え直したものとして理解されている。すなわち、客観的時間における未来に「後続者の世界」があり、過去に「先行者の世界」があり、そして現在に「同時代者の世界」がある、そしてこうした世界の広がり、自己は共在者の世界の「今このように」から捉えている、—シュッツの社会的世界論が描いている世界像は通常このように理解されている。だが「垂直に積み重なる時間」をなす「把持」および「予持」という地平的志向性にもとづいて把握するなら、それとは異なる像が取り出される。すなわち、現在の「共在者の世界」での経験は、一方で把持によって「同時代者の世界」および「先行者の世界」へと、他方で予持によって「後続者の世界」へと、つねにすでに結びついているという性格をもつこと、把持および予持は現在化作用であることから、同時代者の世界、先行

者の世界、後続者の世界はいずれも現在に地平的に宿るものとして捉えられなければならないことが示される。

結論では、「垂直に積み重なる時間」に沿って再構成されたシュッツの世界像の特徴・意義が近代的世界像と比較しつつ示される。「見えるものしか見ない」という性格を有する近代的世界像にはすでに死んでしまった過去の人びとやまだ生まれてきていない未来の人びとは占めるべき位置を持たない。これに対して、「垂直に積み重なる時間」に沿って再構成されたシュッツの地平的な社会的世界像においては、先行者の世界は流れ去ってしまったわけではなく、つねにすでに現在しているのであるし、後続者の世界も未だ到来していないのではなく、つねにすでに現在しているものと捉えられる。したがって「垂直に積み重なる時間」にもとづく世界像においては過去の他者たちと未来の他者たちは現在のうちに宿る、ということが本論文の結論として述べられる。

III 本論文の評価

社会学が対象としている社会現象は時間の中で生起する現象であるので、社会学はこれまでもつねに時間を取り扱ってきたと言える（近代化、都市化、産業化等々）。しかし、そのさい社会学はもっぱら時間の中で生じている変化のほうに目を向け、時間そのものを主題化することはあまりなかった。本論文は社会学が自明の前提としてきた時間そのものを主題とするものである。近年そのような試みは「時間の社会学」として盛んとなってきているが、日本ではその研究動向がいまだ十分紹介されていない。本論文は「時間の社会学」の最近の動向を踏まえて、近代的時間の社会学という新しい研究領域を切り開いた研究として高く評価することができる。

第二に、シュッツの時間論を「垂直に積み重なる時間」という、近代的時間とは異なる時間のあり方を提示したものとして捉え、精緻な読解にもとづいてシュッツの社会的世界論を近代的世界像とは異なる社会像を描いたものとして再解釈したことは、従来のシュッツ研究に新たな一頁を加えたものとして高く評価することができる。すでに死んでしまった者もまた現在に宿る者として捉えるその社会像は、戦争や事故や災害で亡くなった人と向き合いつつ現在を生きるサバイバーの研究に基礎づけを与えるものとなる可能性を持っている。

第三に日本を代表する「時間の社会学」である真木悠介（見田宗介）の時間論の再解釈は特筆に値する成果である（第3章）。非近代社会の時間意識を地として近代的時間意識の構造を浮かび上がらせる真木の時間の比較社会学においては、近代的時間意識の批判を行なうさいには、

図地反転によって今度は非近代社会の時間意識が批判の根拠として用いられることになる。著者は『時間の比較社会学』と『宮沢賢治』を合わせて読むことによって、真木（見田）のうちに「天空の地質学」という「垂直に積み重なる時間」にもとづく近代批判のロジックがあることを見出し、非近代社会へのノスタルジアに退行するのではなく、近代社会そのものに内在する近代社会批判の根拠を発見した。これは真木（見田）解釈における大きなブレイクスルーとして評価することができる。

しかし本論文には課題もまた残されている。

近代的世界像に代わる世界像の提案がなされているが、社会学自体、その近代的世界像の一部として成立し、また近代的世界像を支えてきたことを考えるなら、世界像の修正に伴って、社会学自体のあり方そのものも問い直されなければならないと考えられる。今後、社会学的認識の可能性そのものを反省的に問い直すことが求められる。

また一九七〇年代以降次第に近代的時間そのものを主題化する「時間の社会学」が登場してきたことが述べられているが、なぜこの時期に近代的時間が問題として浮上してきたのかということに関する歴史社会学的な考察が今後求められる。時間自体時間的現象であるとするなら、特定の時間の登場、衰退という現象もまた社会学的に解明することが必要であろう。

本論文は主に学説研究として展開されているが、今後は本研究の成果にもとづいて経験的な研究を行なうことが求められる。

IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、審査委員一同は本論文が博士（社会学）を授与するにふさわしい水準に到達しているものと判断する。